

## 特集：軽井沢の宣教師別荘 ①

### 国の登録有形文化財となった

#### 「旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ」

はじめに

「旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ」は2015年11月17日、国の登録有形文化財として官報告示を経て登録された。東洋英和の宣教師だったミス・ハミルトンとミス・ハードがかつて所有していたウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計のこの別荘については「史料室だより」No.77（2011年11月刊行）ですでに紹介されているので、ご存知の方々もおられるだろう。

この別荘の発見によってカナダ人宣教師ダニエル・ノルマンに始まる別荘地の所有者の変遷、軽井沢と宣教師の歴史、ミセス・ラージやミス・ブラックモアなど軽井沢を訪れた東洋英和の宣教師の現地での交流等が明らかになり、それらの歴史が刻まれた別荘が現存していたことに学院関係者は驚かされたものであった。さらに昨年、その別荘が国の文化財になったという朗報に触れ、学院の歴史に連なる建造物が広くその文化的価値を認められたことで喜びは重なった。

今号ではその別荘がどのような途をたどって文化財となるに至ったのか、また2016年6月に開催された特別見学会での出来事などについて紹介していきたい。

所有者の篤志による来歴調査と修復

最初にこの別荘を史料室のスタッフが訪れたのは2010年8月のことで、1932（昭和7）年に建てられたとされているその別荘がほぼ80年近くの時を経てそこに残されていたことに感慨もひとしおであった。とはいえ、建物は傾いてこそいもないものの、外壁や軒先の木は所々朽ち、床が抜けていたり、1階の暖炉から続く煙突の石組みが一部崩れているなど、よく壊されずに残っていたものだというのが最初の印象だった。そしてたとえ壊されなかったとしても、軽井沢に点在している放置された別荘のように埋没してしまい、その存在が見過ごされてしまう可能性も大いにあったのである。

しかしながらオーナー夫人である山田美枝子氏の「あの建物はもしかしたらヴォーリズ設計の別荘かもしれない」という直感と、ひとかたならぬ熱意によって別荘の来歴が徐々にひも解かれ、その探求は東洋英和の歴史、さらには軽井沢での宣教師やクリスチャンの人々のネットワーク、ヴォーリズの軽井沢における建築事業の歴史に広がっていった。数十年間、忘れられていた別荘の存在がにわかに意味をもってきたのである。



今も修復が続けられている「旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ」

山田氏は別荘の来歴を調査する一方で、ヴォーリズが設計当初に考えていた、軽井沢の自然にマッチした建物のたたずまいを再現できるよう段階を踏んだ非常に丁寧な修復を重ねていった。もはや実用ではない別荘であるのに、歴史を大切にしたいという思いからふたたび家に手を入れていった山田氏のご尽力には頭の下がる思いである。

「長い時間をかけて朽ちていった建物は、長い時間をかけて修復しなければならない」という修復方針のもと、修復の監理は（株）一粒社ヴォーリズ建築事務所、修復の工事は地元軽井沢で代々大工が家業であった小林家のご当主で

ある小林工務店の小林邦秋氏が担当した。短期間に安易な補修を行うのではなく、オーナーの山田氏と建物の細部に至るまで協議しつつ作業を進めていったそうである。

修繕計画は2013年スタートで5年の予定、初年は基礎や柱の水平垂直調査、煙突の垂直調査にはじまり、各部の老朽調査が行われ、土台・柱・梁の修繕が行われた。2014年は屋根や煙突まわりの修繕、2015年には窓枠と窓、外壁の修繕が徐々に行われていった。史料室スタッフが夏に訪れるたびに建物は息を吹き返し、室内も根太(ねだ)の補修により床の陥没が無くなり、ヴォーリズらしい河原石を使った暖炉や台所などが往年の姿を取り戻した。脆くなってしまった柱は継ぎ木をして耐性をあげる工事が行われており、取替えられた柱材をいくつか見せていただいた。

「鉄はさびますが、木は継ぎ木ができるという証明になるかと思います。木は丈夫です」と

いう山田氏の説明通り、80年の間、軽井沢の冬の積雪や湿気に耐え、躯体を支えてきた古材は新たに継ぎ木されることによってこれから先もヴォーリズの建築意匠を伝える役割を果たしていくわけである。

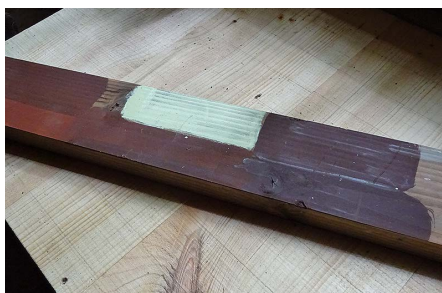
また、外壁に関しては小林工務店と一緒に軽井沢の睡鳩荘(旧朝吹山荘)の仕事にずっと携わっている塗装のベテランの上原勝三郎氏が担当し、デザイナーである山田氏のお嬢様も交えて、わずかに残された塗料から別荘の元々の外壁の色調が検討されていったという。2010年訪問の時点で、家全体の外壁はほとんど素地がみえるまで塗料が剥落していたが、現在は建設当時の色調を可能な限り再現したベンガラ色、窓枠はクリーム色で塗装されている。「所有者が土台に魂を入れることは建物に良いことです」との上原氏の助言により、土台の部分の塗装は全部山田氏のお嬢様が心を込めて担当されたそうである。



朽ちて取替えられた柱材(薪の上に横置き)。  
継ぎ木のため差し替えられた



宣教師の先生方も使っていたかまど



外壁の塗装の色合いについても何度も検討されたという



### 「公共の財」として広がる別荘の存在意義

こうした山田氏のこの別荘への愛着がさまざまな方面に波及し、東洋英和女学院史料室でも軽井沢と宣教師のつながりを調査する大きなきっかけとなった。他所でも、ヴォーリズ研究者や研究会、地元軽井沢の文化団体、大学の研究者等との交流も生まれ、この別荘は文化的・学術的資源として脚光を浴びるようになり、登録有形文化財に申請したほうがいいという声が上がってきたという。そうして長野県軽井沢町の教育委員会の協力もあり、文頭の通り2015年11月にこの別荘は「旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ」として国の登録有形文化財となるに至った。

登録有形文化財とは1996（平成8）年に導入された「文化財登録制度」に基づき、保存及び活用についての措置が特に必要とされる文化財建造物を、文部科学大臣が文化財登録原簿に登録する文化財をさす。阪神・淡路大震災（1995年）により多くの歴史的な建造物等がなすすべもなく失われていった反省もふまえ、社会的評価を受ける間もなく開発などにより消滅してしまうかもしれない多くの近代建築を中心とした文化財建造物を後世に継承していくためにこの制度はつくられた。従来の規制が厳しい文化財指定制度に比べると、届出制と指導・助言等を基本とする緩やかな保護措置を講じるものであることがその特徴である。



作り付けの棚のある居間の様子

「旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ」について、文化庁のホームページでは「旧軽井沢地域に所在する、ヴォーリズ設計の別荘建築。木造二階建、半切妻屋根で、外壁は下見板張、内部も板壁を基本とする比較的簡素な内外観であるが、水平の連続窓や石積みの煙突、室内の作り付けの調度類などに、ヴォーリズの別荘建築らしい特徴が認められる」と解説されている。昨今、ヴォーリズ建築である神戸女学院の校舎12棟が国の重要文化財に指定（2014年）されるなど、ヴォーリズ建築への注目が集まるなかでの登録だったといえる。広く一般にその文化的価値を認められるものとして、「旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ」は位置づけられたわけである。



暖炉の破損したカウンターも昔のデザイン通りに修復された



二階の様子。床が落ちていた部分（画面中央）も修繕された



特別見学会（6月5日）にて。東洋英和の関係者、ヴォーリス建築愛好者などが集まった

### 特別見学会でのスペシャルゲスト

東洋英和の旧ヴォーリス校舎が建てられたのは1933（昭和8）年で、この別荘が建てられたのと時期を同じくしている。当然、当時の校長であるミス・ハミルトンとヴォーリスは知り合いであった。軽井沢でヴォーリスは夏に建築事務所を開き別荘設計でも有名だったため、ミス・ハミルトンがミス・ハードと軽井沢で別荘を新しく建てる際にヴォーリスに設計を依頼したのは自然な成り行きだったのだろう。別荘の設計依頼と校舎設計依頼のどちらが前後して進行していたのかは不明であるが、ミス・ハミルトンにとってヴォーリスは信頼できる建築設計者だったことは間違いないだろう。

お気に入りの別荘で先生方はどのような夏の生活を送っていたのだろうか―残された別荘の空間から想像をたくましくしている時に、実はミス・ハミルトン、ミス・ハードとともにその別荘で過ごしたという卒業生がいらっしやるのが判明した。そして2016年6月5日に行われた別荘の特別見学会にその卒業生、武藤和子さん（保育専攻部1949年卒。静岡の賤機幼稚園元園長）が参加され、武藤さんは実に76年ぶりに別荘との再会を果たすことになった。

昭和10年代、ご家庭の事情で菅沼義子先生（幼稚園師範科1924年卒。長野県、静岡県で長年にわたり幼児教育に従事）の養女となり、当時小学生だった武藤さんは菅沼先生とともに外国人宣教師の先生方と夏に一週間ほど軽井沢に滞在していたという。

武藤さんがオーナーの山田氏に案内されて別荘の内部を見て回ると、メイドさんの部屋と考えられていた部屋については「別荘に女中さんはいなかった。料理もなにもかも先生方ご自身がなさっていた」とのことで、ストーブの上に鍋を置いて、武藤さんが大好きだったプラムを先生方が煮てください、それをパンにつけていただいたことなど当時を知る人ならではのエピソードが次々と語られていった。さらには屋根裏にあったトイレ用の木箱（※別荘のトイレは穴の開いた木箱の下にたらいを置く簡素なものだった）が、幼い日に武藤さんも使用していた木箱だったことも判明した。武藤さんは二階の一番見晴らしのいい角の部屋に寝ていたという。当時はベッドも置かれていたようで、小さかった武藤さんを宣教師たちが見守り育てていた様子が武藤さんの言葉の端々からうかがえた。

### 1940年 最後の別荘滞在とクリスマス

この別荘を武藤さんが最後に訪れたのは1940（昭和15）年のクリスマスで、武藤さんが小学校5年生の時だった。養母の菅沼先生と武藤さんは上田に住んでいたが、この時代、時局が厳しさを増すなかで宣教師の先生方と親しかった菅沼先生は、憲兵に目をつけられてしまい、子ども心に養母と宣教師の先生方が置かれた厳しい状況を察知していたという。

そして1940年の夏は宣教師の先生方が、アジア方面の情勢が緊迫し今後訪問できなくなるかもしれないという予測のもと夏休みは上海を訪

れていたため、軽井沢滞在はクリスマスの時期となった。そしてそれが最後の別荘の滞在になったという。

ミス・ハミルトンから「この別荘はガントレット恒子さんにおゆずりしたからもう行かないよ。今年で最後だよ」と言われたことがとても残念で、武藤さんはその「ガントレット恒子さん」の名前を忘れようにも忘れられなかったそうである。内輪の者だけで過ごした別荘でのクリスマスでは「丘の上の教会堂」という讃美歌を日本語で歌い、その歌詞「雪に埋もれし…」で歌われている情景が、その別荘での情景と重なって今でも深く胸に刻まれている、と当時をしのびながら武藤さんは語ってくれた。

そうしてこの別荘の所有はガントレット恒子（矯風会、婦人運動に尽力、国際舞台で活躍したクリスチャン）とG.E.L.ガントレット（自給伝道隊の一員として来日、日本へのパイプオルガンの導入、秋芳洞の発見などで有名。日本に帰化）夫妻のつながりから土井利章氏（越前大野城主・土井家13代目）に移っていった。

その後、国際情勢が緊迫し次々と宣教師が帰国していくなかで、ミス・ハードもいよいよ帰国することになり1941（昭和16）年4月、菅沼先生と武藤さんの二人は横浜で先生を見送った。ほかにも英和関係者がいたけれども憲兵の監視を各人が十分に意識しながら、さりげなく散らばってお別れしたそうである。続く厳しい戦争の時代を経て、武藤さんは宣教師の先生方の思いを継いで幼児教育に携わるようになった。戦後になって武藤さんは軽井沢に別荘を探したも

のの見つからないままであったという。そして76年ぶりにやっとその別荘を訪れることになった武藤さんは「この懐かしい場所に来られたのは、神様のお守りです」という感謝の言葉とともに、山田氏にミス・ハードゆかりの食器や花器を贈呈され、特別見学会に参加した人々に大きな感動を与えた。

### 文化財を支えていくには

2010年に別荘の存在をお知らせいただいて以来、山田氏との折々の交流から東洋英和の史料室も多くの史実を掘り起こす機会が与えられた。今回のケースのように所有者ご本人の熱意と多大なるご尽力により東洋英和に連なる歴史を有する建造物が登録有形文化財になったことは驚くべき経過だったといえる。

しかし、現在の文化財登録制度においては建造物という維持が難しい文化財に対し、その修復等に補助金が出るわけではない。軽井沢の森に埋もれていた別荘を発見し、個人で修復保全し、多くの人々にその恩恵を与えてくれた山田ご夫妻のご篤志に大いに感謝しなくてはならないだろう。

史料室では東洋英和や宣教師に関する調査を進め山田氏と情報交換を行いながら、「史料室だより」No.77で別荘の歴史をまとめて刊行したことによりこの別荘の文化的価値を公表できたことは、小さいながらもせめてもの恩返しであった。今後もこの別荘の存在を心に留め、東洋英和関係者、同窓生諸姉とともに何かしらかたちでこの別荘の活用に協力していけたら幸いである。

松本 郁子（史料室嘱託）



ミス・ハードから贈られた食器について説明する武藤和子さん



登録有形文化財のプレート

## 特集：軽井沢の宣教師別荘 ②

### ブルックサイド・コテージの歴史

#### はじめに

ここで取り上げる軽井沢にあった宣教師の別荘は、夏休みに家に帰れない寄宿生を預かったという、かのミス・ブラックモアの別荘である。『東洋英和女学院百年史』には、彼女はこの別荘を処分して1919年に託児授産事業の興望館開設費用にあてた、と書かれている。

写真で見ると、和風の畳敷き二階建てで、開放的な造りであり、最初から大人数の生徒が共に寝起きするのに困らないように設計されたように思われる。このコテージでひと夏を過ごした生徒たちは、その楽しい合宿生活を満喫したようである。ブルック(小川)のすぐそばにあって、洗濯はその小川の冷たい水を使った。食事当番や掃除当番が交代で課せられ、自由時間にはテニスをしたり町に買い物にも出かけた。日曜日には揃ってユニオンチャーチに出席、時々ハイキング、火曜日の夜にはユニオンチャーチで開かれる音楽会に出かけた。その様子は生き生きした文章で『東洋英和女学校五十年史』に2編寄稿されている。

一昨年、学院短期大学時代から33年間、学院で教鞭をとられたミス・ジュティーンが、自分は戦後、「ブルックサイド・コテージに夏になると行っていた」と回想されていることをうかがい、『百年史』との齟齬が気になっていた。

では、このブルックサイド・コテージはいつ建てられ、いつ壊されたのか。

昨年、登記簿謄本を調べてみると、知られざる歴史が浮かび上がってきた(別表を参照のこと)。

#### ブルーダム所有の時代

まず、この土地(現万平ホテルの近く)を最初に手に入れたのは、カナダメソジスト教会宣教師W.ブルーダムであった(1904年)。外国人なので、当時の慣習どおり、999年の期限付きの購入だった。彼は主に長野、富山の伝道にあたった。1907年に帰国したので、その間に別荘を建てたかどうかは不明である。

#### ブラックモア所有の時代

1909年にミス・ブラックモアがこの土地を購入し、ブルックサイド・コテージを建てた。生徒を預かるのに、数人の若い日本人の教師(水野菊や小沢房など)の手を借りた。軽井沢での生徒と一緒に和やかな写真にはミス・クレイグやミス・コーテス、ミス・チャベルなどが写っているが、どなたが生徒たちと寝食を共にしていたかはわからない。というのは、ミス・クレ



ブルックサイド・コテージ

イグやミス・ハーグレイヴの別荘も近くにあったからである。生徒の中には、複雑な家庭事情を抱えた柳原燐子(白蓮)もいた。

1919年、社会事業にも熱心に取り組んでいたミス・ブラックモアは日本キリスト教婦人矯風会外人部の一員として、軽井沢の土地の半分(おそらく崖の下側)を売却、3,000円を本所に設立したセツルメント、興望館の建設費用として寄付した。売却された土地には、その後アメリカ人のメジャー氏がヴォーリズに依頼して別荘を建てた。(この通称「旧メジャー山荘」は2011年に取り壊された。)

このとき残された半分(おそらく崖の上側)にコテージは建っていて、その後もずっと存在していた。

#### ケギー所有の時代

1925年をもってミス・ブラックモアは帰国する。おそらくその際に、ブルックサイド・コテージはミス・ケギーの手に渡った。

ミス・ケギーは1908年来日、家政学が専門で東洋英和、山梨英和で教えた。1914年、女子の職業訓練学校カートメル女塾(甲府)の設立に尽力し、1918年第一次世界大戦終結時には、赤十字に参加してシベリアに行った方である。

1927年から1933年の間、彼女は健康上の理由でカナダに帰国していた。1933年に復職して浜松に赴任する。こうした事情を考え合わせると、別荘がケギー所有になってから生徒の合宿は行われなかったのではないだろうか。1940年帰国、1941年病気のため引退する。

#### 敵産管理の時代

1941年太平洋戦争が開戦した。

戦争中、敵国人となったミス・ケギーの土地

## ブルックサイド・コテージ 土地所有者の変遷

1904 (明37) 年	プルーダム取得 (売買)	1907年 プルーダム離日
1909 (明42) 年	ブラックモア取得 (売買)	ブルックサイド・コテージを建て、夏休み中 生徒を預かる
1919 (大 8) 年	土地を分割し、半分を売却 (のちメジャー山荘が建つ) 売却金は社会福祉施設「興望館」建設資金とする	
1925 (大14) 年	ブラックモア離日	ケギー 取得 (売買)
1940 (昭15) 年	ケギー離日	
1942 (昭17) 年	敵産として強制管理下におかれる	太平洋戦争 (1941—1945) 年
1943 (昭18) 年	日本人が取得 (売買)	
1949 (昭24) 年	ケギーに返還 在日本カナダ合同教会宣教師社団に贈与 しばらく、宣教師たちが盛んに利用	
1964 (昭39) 年	在日本インターボード宣教師社団に寄付	
1967 (昭42) 年	タンブリッジ、ホーニングに贈与 ブルックサイド・コテージを壊し、 建て直す	
1986 (昭61) 年	タンブリッジ帰国 日本人に売却	

ブルックサイド・コテージ 存続



ミス・ブラックモア



ミス・ケギー



ミス・タンブリッジ



ミス・ホーニング

は日本政府が敵国人の財産として強制管理、競売処分された。贖本によるとまず不動産会社が入手し、それから個人名が見られる。買った人は疎開先として購入したのであろう。しかし、終戦により強制管理は解かれ、土地建物は元の所有者の元に戻るようになった。

### 戦後～1960年代

1949年この土地はいったんミス・ケギーに返還された。しかしそれは書類上のことである。実際には彼女は日本に戻らず、この土地は「在日本カナダ合同教会宣教師社団」に贈与された。この時期は、大勢の宣教師たちがよくこのコテージを利用したそうである。4つのベッドルームのある大きな別荘だった、とジュティーン先生は回顧しておられる。

1964年に「在日本インターボード宣教師社団」(北米の主要な教会から成る社団)に所有者が替わる。

### タンブリッジ、ホーニング所有の時代

1967年には、このコテージをよく利用していたミス・タンブリッジとミス・ホーニングが、社団に何らかの寄付をして贈与を受ける。さす

がに、よく利用された築60年の木造別荘はあまり資産価値がないくらいに傷んできていたのではなかろうか。二人はコテージを取り壊し、建て直した。ここにブルックサイド・コテージの歴史は終わりを告げたのである。

このお二人はやはりカナダ合同教会の宣教師で、ミス・タンブリッジは、1950年から1986年まで長野県の上田で伝道なさっていた。ミス・ホーニングは本学短期大学で教え、後に高等部のカナダ学習旅行に協力して下さった方である。

1986年、ミス・タンブリッジの帰国の際にこの土地は分割されて売却されたという。

昨夏この場所を訪ねてみたところ、モダンな新しい別荘が建ち、5年前旧メジャー別荘がまだ建っていたころと比べると、風景は一変していた。往時をしのぶよすがは何もなく、軽井沢の変貌を目の当たりにした思いだった。

終わりに、ブルックサイド・コテージの歴史を調べるきっかけを下さったジュティーン先生と、長野地方法務局佐久支局の登記簿贖本の調査に通ってくださった大井真理子氏(高等部卒・元中高部教諭)に衷心より感謝したい。

酒井 ふみよ (史料室嘱託)

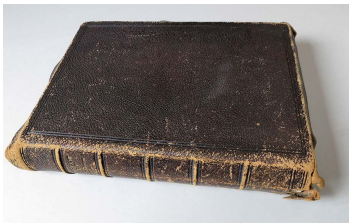
## 〈資料紹介〉 29

### ミス・カートメルの聖書が修復されるまで

#### 130年を経て、劣化がすすんでいた聖書

ミス・カートメルの聖書は、東洋英和女学院の第一級資料として普段は厳重に保存容器に収められ収蔵庫に保管されているが、追悼記念日礼拝や創立記念日前後に期間を限定して展示を行ってきたため、実物をご覧になった方も少ないだろう。

この聖書は1882年にミス・カートメルがカナダから日本に旅立つ前に人から贈られたもので、1930年には当時ソウル市で朝鮮総督夫人として暮らしていた教え子の齋藤春子に贈られ、さらに1964年の学院創立80周年の折には齋藤春子から学院に寄贈された（詳しい経緯については既刊の『カナダ婦人宣教師物語』、「史料室だより」No.74を参考にさせていただきたい）。そのようにして何度も海を越えようやく麻布の地に帰ってきたミス・カートメルの聖書は、130年以上も前に刊行された本であったため近年は劣化も激しく、展示をするにも困難をきたすような状態となっていた。



修復前のミス・カートメルの聖書。革表紙には一部破れも見られ、角の革は磨耗してしまっていた



聖書を開けると、綴糸が切れてしまっているためページがバラバラになっていた。本紙も、経年劣化と、繰り返しページを繰られたことによる傷みで取り扱いに注意を要した



修復完了を記念した展示のようす

#### プロによる原型に忠実な修復

そのため学院では洋書修復の第一人者であるアトリエ・ド・クレの岡本幸治氏に修復を依頼し、2015年8月より2016年6月まで作業を行っていた。

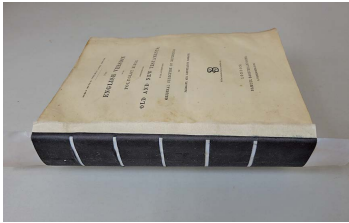
修復の基本方針としては見栄えよく、きれいにするということよりは、「製本時の原型になるべく忠実」に、当時と違う素材や技法を用いる場合には可逆性（必要に応じて元の状態に戻せること）を考慮することが重視された。右ページに岡本氏からうかがった具体的な処置の記録を紹介する。



聖書の修復をしてくださった岡本幸治氏

### 【革の破損部分の補強】

破損した部分は、革による補強を行わなかった。作業時間の短縮のためもあるが、現代の革はどのような加工がされているか不明で、かえって将来の劣化の原因となる可能性もあるため使用せず。革の劣化部分は染色和紙と可逆性（乾燥後でも革を傷めることなく安全に剥がすことが出来る性質）のあるボンド系接着剤で行った。



紺色に染色された和紙を用いて補填された背の部分

### 【革の磨耗への処置】

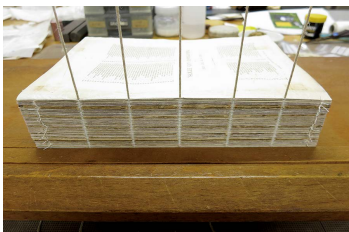
革の表面には保革油、セルロース、アクリル系樹脂の塗布を行った。膜ができるため、劣化をもたらす外部からのガスの書籍本体への浸透を防ぐ効果もある。



乾いて擦り切れてしまった革に光沢が戻り、取り扱いも容易になった

### 【本の綴じ直し】

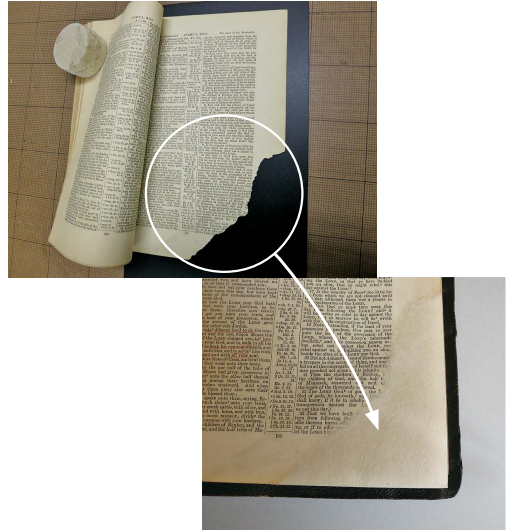
糸綴じの土台となる部分の紙がかなり劣化し、綴じ糸も切断され本紙がバラバラの状態であったが極薄の和紙による補強を各ページに施し、本を綴じ直すことを可能にした。



脆弱だった紙が丁寧に補修され、糸綴じができるまでに強度を増した

### 【本紙の劣化、破損、欠損への処置】

本紙の劣化、破損、欠損も和紙で修復。書き込みの文字の上に補填された和紙が重なって文字などが見えなくなならないよう、和紙の繊維を細かく割くなどして、今後の閲覧に支障をきたさないよう配慮した。書き込み等で多用されている赤インクは容易に水に流れ出てしまう可能性があるため、のり付けの際の水分量などにも留意しながら慎重な作業を行った。



破れていたページも和紙で継ぎ足された

### 史料室委員からあがった歓声

修復作業が終了し、岡本氏に聖書をご返却いただいた時、史料室のスタッフは細部にまでわたる懇切丁寧な修復の技に驚嘆した。慎重に取り扱わなければ壊れてしまいそうだった聖書が見事によみがえったのである。

修復が完了した聖書は史料室委員会でも披露され、そこでも委員の先生方からどよめきの声が起こった。

修復により格段に閲覧しやすくなった聖書であるので、今後はミス・カートメル各ページにわたる多数の書き込み等を検証し研究するなど、この聖書の活用にも途が開かれた。この秋には修復完了を記念して本部・大学院棟の展示コーナーで長期展示も行っている。この機会にぜひ、修復なったミス・カートメルの聖書を多くの方々にご覧いただきたい。

松本 郁子（史料室 嘱託）

## 〈思い出の先生がた〉32 衛藤瀋吉先生

好漢 衛藤 瀋吉先生

寺澤 東彦

1998年度のキリスト教学校教育同盟の総会は北海道の北星学園で開かれ、院長に就任して間もない衛藤先生も出席されました。北星学園余市高校が全国から生徒を受け入れた実践報告の後、先生が「私は亜細亜大学学長として学内全体の協力が得られず失敗しましたが、貴校が教職員一致しての成果はどう工夫されたのか。」と問われました。「偏差値より個性値、一芸一能入学、史上初めてのTVコマーシャル、単位認定を伴う数百名規模の留学制度」などで耳目を集め、大学の評価を高からしめたことで著名な方でありましたが……。私とその率直素朴なお人柄に感銘を覚えた最初でありました。

ある時、代表者会（その後、学院運営協議会と改称）で、「幼小と中高の給与体系を別にしたらどうか」の提案がありました。私は新参の小学部長として教員たちの学習や生活指導のきめ細やかさ、忍耐強さ、優しさなどに常々驚嘆させられていましたし、まして幼稚園では更なるものがあると感じていました。はたして即座に「幼小の教育こそ重要で責任は重い。その教育を軽んずるような発想はよろしくない」と憤然たる口調で断定されました。確かに就任当初から「教育は大学では遅い。幼い時にこそ力を尽くさなくては効果は薄い」という趣旨の発言を何度もされてきましたから、心中に快哉を覚え尊敬の念を深くしました。

これまでの学院に例を見ない怒声の炸裂にはヒヤヒヤしましたが、その裏には温かい真情が隠されていました。

IT教育推進のために尽力され、全教職員にパソコンが与えられました。それまでパソコンが不得意だった者たちも、これによって重い腰を上げ、講習を受けてマスターしていきました。時代の先を読む先生ならではの改革でした。

ある時、「教職員用の相談室を作りたいが小学部の部屋を使わせてくれないか」とのお電話がありました。「他部に比して狭い空間ですが、

相談室に足る場所がありましたらお使いください」と答えますとにわか泣き声で「小学部だけが協力してくれる。有難う」と泣かれて驚いたこともありました。ご退任の送別の席でも人目を気にせずには慟哭される姿も拝見しました。純な心をお持ちなのだ改めて思われました。

今日の「楓の会」の如きものを発案され、事務方に検討を指示されましたが実現するに至らず、遺憾の面持ちでした。「院長室だより」には「院長室のドアはいつも開いています」と書かれ、心は常に学院内に向いていたと思います。亡くなられた後の学生会館での「偲ぶ会」は会場の廊下まで人があふれ、先生の学識、お人柄に魅せられた方の多さに圧倒されました。先生の見識と豊かな人脈を利用してのお働きを学院としてはもっとお願いしても良かったのでは、と残念に思ったことでした。

（元中高部教諭・前小学部部长）



衛藤瀋吉先生

### 衛藤 瀋吉（えとう しんきち）先生

#### 一略 歴一

- |       |        |                                    |
|-------|--------|------------------------------------|
| 1923年 | 11月16日 | 旧満州 奉天（現 瀋陽）に生まれる                  |
| 1943年 |        | 東京帝国大学法学部政治学科入学                    |
| 1945年 |        | 学徒動員先の広島にて被爆                       |
| 1949年 |        | 東京大学大学院退学 東京工業大学助教授、東京大学教授（～1984年） |
| 1984年 |        | 青山学院大学教授                           |
| 1987年 |        | 亜細亜大学学長（～1995年）                    |
| 1998年 |        | 東洋英和女学院院長（～2002年）                  |
| 2007年 | 12月12日 | 永眠（享年 84歳）                         |
- 国際政治学者、『近代中国政治史研究』など著書多数

## 史料室の活動より (2016年4月～9月)

(☆は複数回の事項)

- 4月・新任者辞令交付式後、新任者へ学院の沿革を説明
- ・来室—1956年高等部卒の方々 卒業60周年記念文集「風」ご寄贈
  - ・来室—都立小石川中等教育学校同窓生2名 伊藤長七氏に関して情報・資料交換
- ☆村岡花子記念講座に関する打ち合わせ  
☆来室—総務課担当者 「楓園」掲載画像検索
- ・画像提供—ほけかる倶楽部へ 展示コーナーの画像
- 5月・「史料室だより」No.86 発行
- ☆来室—卒業生 「東洋英和女学院資料集4号」内容に関する質問
  - ・来訪—ジャック・イビー氏 (ミス・カートの時代の宣教師イビー師の兄のひ孫 音楽史専門の大学教授) 院長、学長との懇談に加えていただく
  - ・来室—村岡恵理氏
  - ・照会—朝日新聞書籍編集部より 戦時中の清水由松氏の肩書きなど →理事長
  - ・来室—卒業生 「史料室だより」古いバックナンバーの閲覧 (大学院図書室にて)
  - ・画像提供—(株) 厨子王へ BS朝日「あらすじ名作劇場」のため 片山廣子画像1点
  - ・照会—中高部教諭より 過去の「要覧」は揃っているか →一部コピーを提供
- 6月・来室・納品—岡本幸治氏 ミス・カートの聖書修復完了
- ・展示見学・来室—津田 仙関係者4名 卒業生2名の在籍確認・写真結婚の実例ご教示
  - ・来訪・作業—元中高部教諭 村岡花子文庫目録作成作業 (7月にかけて6日間)
  - ・来室—前小学部長 今号〈思い出の先生がた〉執筆のため故衛藤藩吉院長の資料閲覧
  - ・来室・展示見学—関西学院学院史編纂室より
  - ・出張—旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ 特別見学会 (2名)
  - ・画像提供—中高部へ 5点
  - ・出張—青山学院資料センター 日本メソジスト教会年会記録・写真などを調査
  - ・照会—小学部教諭より 小学部の聖歌隊の開始年 →1974年
  - ・来室・調査—大学教員「日本キリスト教
- 教育学会」発表準備
  - ・第1回史料室委員会開催
  - ・画像提供—心理相談室へ 1点
  - ・照会—短大卒業生より、旧短大校舎サークルの部屋の画像がないか →調査中
  - ・来室—卒業生 『フェリス女学院百年史』閲覧
  - ・来室—フェリス女学院講師 ヘニガー夫人 (宣教師夫人) についてなど懇談
  - ・画像提供—短大卒業生へ学会発表のため2点
  - ・来室—有賀誠一氏 懇談
- 7月・来室・調査—卒業生 大江宏建築事務所設計の小学部校舎について →画像提供 国際文化会館のフェイスブックに掲載
- ・見学—大阪芸術大学通信課程の学生 ヴォーリズ研究
  - ・来室・調査—ウイスコンシン大学博士課程建築専攻の学生 同窓会会報閲覧 (大学院図書室にて 6日間)
  - ・照会—恵泉女学園史料室より 資料貸出規則について
  - ・来訪—村岡美枝氏
  - ・打ち合わせ—総務課担当者と、9月からリニューアルとなる学院HPについて
  - ・来室・調査—短大卒業生 東洋英和のYWCAの記録を閲覧
  - ・画像提供—TV朝日映像へ 「じゅん散歩」にて使用 きみちゃん像1点
  - ・照会—「ララ70周年記念フォーラム」企画のため、バット博士の資料の所蔵確認
  - ・画像提供—紫友同窓会 (都立小石川中等教育学校同窓会) へ 卒業記念写真など2点
  - ・来室—WMS研究関係者 戦争と日系カナダ人関係資料の閲覧 (大学院図書室にて)
- 8月・照会—静岡英和関係者 新渡戸稲造と英和の関係について →山梨英和の卒業式記念写真、『山梨英和学院120年史』
- ・照会—法人事務局・中高部より 追悼記念日礼拝ご招待のため、英和関係者ご遺族の連絡先
  - ・来訪—日本文芸家協会より 9/15の富士霊園における村岡姉妹講演会チラシご持参
  - ・来訪・展示見学—ハーバード大学学生、アテンド 村岡美枝氏・プリンスエド

- ワード島観光局担当者
- ・メールで入手—カナダのクレグ・ディクソンさんより ミス・ブラックモアが来日前に教えた教え子（ディクソンさんの父）宛ての書簡3通
- ・画像提供—国際文化会館へ 航空写真1点
- 9月・学院HPリニューアルにともない、史料室のページ新設
- ・展示替え—「村岡花子記念講座紹介展示」9月5日～2017年1月28日（予定）
- ・来訪・見学—山梨県立都留高等学校より、生徒2名、引率教員2名、アテンド村岡恵理氏
- ・来室・作業補助—本学大学教職課程の4年生7名 史料室書庫を見学後、作業手伝い
- ・画像提供—平凡社へ コロナ・ブックス『作家のおやつ2』のため 片山廣子1点
- ・出張—静岡英和同窓生による創立130周年イベントへ
- ・資料提供—CWS Japanへ 「ララ70周年記念フォーラム」写真展のため バット博士ご葬儀プログラムのコピー
- ・第2回史料室委員会開催
- ・画像提供—中学部学校案内のため 6点
- ・来室、調査—大学非常勤講師 「女学雑誌」掲載の東洋英和関連記事など

### 史料室所蔵資料の目録化作業報告

- 史料室一室内一部模様替え（事務機器2点撤去、書架1連購入してファイル類一部を移動）、不要紀要の選別、除籍、逐次刊行物の整理保存箱への収納（順次）
- 紀伊國屋書店—旧宣教師館にあった資料の目録作成、逐次刊行物の目録作成開始
- 出版文化社—耐火金庫内および史料室内の資料の概要目録作成（主に貴重資料と学院関係）

### 主な寄贈資料

- \* 村岡花子文庫追加 安中花子自筆作品など：歌集『さくら貝』、歌集『ひなげし』、「短歌」、「雑記帖 その三」
- \* 『キリスト教保育創始130年記念』キリスト教保育連盟製作（DVD）
- \* 記念品：腕時計（ミス・ハードからの贈りもの）、バッジ（ミス・ハミルトンからの贈りもの） 武藤和子氏（卒業生）より
- \* 岩原さかえ先生の遺品 一箱
- \* *The Fairy Land of Science*（小学科卒業時、カナダ大使からの記念品）山東初子氏（卒業

生）遺品

- \* プリント写真 数枚
- \* 楽譜：長尾壽見氏、田中友子氏の校歌変奏曲
- \* こどもさんびか、歌集「こかけ」
- \* 『津田主一の生涯と業績 神と人と音楽に仕えて』丸山忠璋著
- \* 『津田仙の親族たち』津田道夫著／『津田仙評伝』高崎宗司著 草風館
- \* 『旦那さんはアスペルガー 奥さんはカサンドラ』野波ツナ著（卒業生）
- \* 『スカンピーのドラゴンたいじ!?』押川理佐（卒業生） 学研教育出版
- \* 『ハヤト、ずっといっしょだよ』井上こみち著 アリス館（主人公モデルは卒業生）
- その他 他大学年史・紀要多数

### 購入資料

- \* 『アメリカ・キリスト教史 理念によって建てられた国の軌跡』森本あんり著 新教出版社
- \* 『近代日本保育者養成史の研究—キリスト教系保姆養成機関を中心に—』永井優美著 風間書房

### ＜お知らせ＞

- ・学院のホームページがリニューアルされ、史料室独自のページが新設されました。「史料室だより」のバックナンバーも、いずれ全号ホームページから読めるようになる予定です。
- ・現在開催中の本部・大学院棟展示コーナー企画展は下記のとおりです。
- \* 村岡花子記念講座紹介／ミス・カートメルの聖書  
2016年9月5日～2017年1月28日
- \* 旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ—登録有形文化財となった宣教師別荘—  
2016年10月1日～2017年3月31日

### ＜お知らせ＞

史料室では、学院の歴史や学生生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。ご家庭にあってご不要のものがありましたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の著作も収集しています。

お問合せ先は下記のとおりです。  
東洋英和女学院史料室（法人事務局内）  
Tel 03-3583-3166（直） Fax 03-3583-3329  
E-mail : archive@toyoeiwa.ac.jp